



TITLE:

陶希聖著作目録附略傳

AUTHOR(S):

佐伯, 富

CITATION:

佐伯, 富. 陶希聖著作目録附略傳. 東洋史研究 1937, 2(3): 281-286

ISSUE DATE:

1937-02-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/138721>

RIGHT:

陶希聖著作目錄 附略傳

佐伯 富編

一、論 文

| | |
|----------------------|------------------------------|
| 士大夫身分與宗教 | 春潮月刊 一、二 (二七、二) |
| 科舉制底的意義 | 同 (同) |
| 民衆組織內理論和方案 | 新生命 一、六 (二七、六) |
| 國民黨的革命方略 | 同 一、八 (二七、八) |
| 從中國社會史上觀察中國國民黨 | 同 一、九 (二七、九) |
| 立法政策與立法技術 | 同 一、一〇 (二七、一〇) |
| 中國社會到底是什麼社會 | 同 (同) |
| 官僚制度及其摧毀 | 同 一、一一 (二七、一一) |
| 中國官僚及軍備之社會史的觀察 | 同 一、一二 (二七、一二) |
| 中國案法勢力及其摧毀 | 同 二、一 (二八、一) |
| 關於士大夫身分的幾個問題 | 同 二、二 (二八、二) |
| 中國封建制度的消滅 | 同 二、三・三、五 (二八、三・九、五) |
| 民族問題與民族主義 | 同 二、七 (二八、七) |
| 中國政治思想之發達與民族主義 | 同 二、八・九 (二八、八・九) |
| 中國之民族及民族問題 | 東方雜誌 二六、二〇 (二八、一〇) |
| 中國前代革命 | 新生命 三、一 (二九、一) |
| 中國之商人資本及地主與農民 | 同 三、二 (二九、二) |
| 民國十八年之中國社會 | 東方雜誌 二七、四 (同) |
| 統一與生產 | 新生命 三、四 (二九、四) |
| 唐代中國社會之一班 | 同 (同) |
| 中國社會の封建性 | 滿 誌 七、六 (同) |
| 流寇之發展及其前途 | 新生命 三、七 (二九、七) |
| 科學的復古與族望制度 | 同 三、九 (二九、九) |
| 中國經濟及其復興問題 | 東方雜誌 二八、一 (三〇、一) |
| 關於中國的封建制度(朱其華共著)讀書雜誌 | 一、一 (同) |
| 西漢に於ける經濟の發達 | 經濟史研究 一六、一七、一八、二〇 (三〇、三・四・六) |
| 支那に於ける婚姻と家族の發達 | 滿 誌 八、三、四、五 (三〇、三・四・五) |

所謂集居獨立者(中國家制問題論爭)

東方雜誌二八、一九(二〇、九)

辛亥革命的意義

同 (二〇、一〇)

談東北義勇軍

獨立評論二四 (二二、一〇)

中國之法西斯蒂

時代公論一一 (二二、六)

中國社會形式發達過程的新估定

讀書雜誌二、七八(二一、八)

西漢的社會與政治

民族一、三一、七(二二、三一七)

漢儒的僵尸出祟

讀書雜誌三、三(二二、四)

郭子儀與寒山子

清華週刊三九、四(同)

東漢之社會政治

中國經濟一、六(二二、九)

中國歷史上的集權與分權

獨立評論八一 (二二、一二)

古代國與野之分

清華週刊四〇、一、二(二二、二)

中國經濟發達的一個趨勢

中國經濟二、一上(同)

中國個有的社會思想

文化建設一、一(二三、一〇)

讀中國經濟史研究專號以冊以後

中國經濟二、一〇(同)

宋代的各種暴動

中山文化教育館、季刊(二三、一一)

對於尊孔的意見

清華週刊四二、三(同)

王安石以前田賦不均與田賦改革

食 貨一、一(二三、一二)

十六七世紀間中國採金潮

同 一、二(同)

搜讀地方志提議

同 (同)

齊民要術的田器及主要用法

國學季刊五、二(三四、)

元代的佛寺田園及商店

(讀元史隨筆之一) 食 貨一、三(三四、二)

元代彌勒白蓮教會的暴動

(讀元史隨筆之二) 同 一、四(同)

民主與獨裁的爭論

獨立評論一三六(同)

都市與農村

同 一三七(同)

古代的土壤及其所宜的植物的記載

清華學報一〇、一(三四、二)

元代江南的大地主

食 貨一、五(三四、三)

中國政府制度略史(上古及古代)

文化建設一、五(同)

同

(中古) 同 一、六(三四、三)

元代西域及猶太人的高利貸與頭口搜索

食 貨一、七(同)

金代猛安謀克的土地問題

同 一、八(同)

明代彌勒白蓮教及其他「妖賊」

同 一、九(三四、四)

爲什麼否認現在的中國答胡適

文化建設一、七(同)

五代的都市與商業

食 貨一、一〇(同)

| | | | | | |
|---------------------|----------------|-------------|--------------------------------|-------------|------------|
| 五代的莊田 | 同 | 一、二(三四、五) | 唐代管理「市」的法令 | 同 | 四、八(同) |
| 十一世紀至十四世紀的各種婚姻制度(上) | 同 | 一、二(同) | 唐代處理商客及蕃客遺產的法令 | 同 | 四、九(二五、一〇) |
| 同 | 同 | 二、三(三四、七) | 唐代官私貸借與利息限制法 | 社會科學二、二(同) | |
| 北宋初期的經濟財政諸問題 | 同 | 二、二(三四、六) | 西漢時代的客 | 食貨五、一(二六、二) | |
| 周代諸大族的信仰和組織 | 清華學報一〇、三(三四、七) | | 宋代社會之一斑 | 社會學刊四、三 | |
| 土他兼併與井田思想 | 經濟學報一、一(同) | | 二、單行本 | | |
| 宋代的職田 | 食貨二、四(同) | | | | |
| 北宋幾個大思想家的井田論 | 同 | 二、六(三四、八) | 中國社會之史的分析 | (二八、一) | |
| 明代王府莊田之一例 | 同 | 二、七(三四、九) | (東亞經濟調查局發行經濟資料、一五、一〇・一二ニ譯出セラル) | | |
| 盛衰戶口較多的州軍 | 同 | 二、一〇(三四、一〇) | 士大夫身分與知識階級(右附錄一) | | |
| 戰國至清代社會史略說 | 同 | 二、一(三四、一二) | 中國社會史的一個攷察(右附錄二) | (同) | |
| 滿族未入關前俘虜與降人 | 同 | 二、二(同) | 中國社會之史的分析(新生命叢書) | (同) | |
| 疑古與釋古 | 同 | 三、一(三四、一二) | 中國社會與中國革命 | (同) | |
| 齊民要術衰田園的商品生產 | 同 | 三、四(二五、一) | 辯士與游俠(中國歷史叢書) | (二〇、六) | |
| 北宋亡後北方的義勇軍(黃硯璠共著) | 同 | 三、五(二五、二) | 中國社會現象拾零 | (二〇、八) | |
| 元代長江流域以南的暴動 | 同 | 三、六(同) | 西漢經濟史(史地小叢書) | (同) | |
| 民族運動的實在性 | 同 | 三、八(二五、三) | 中國政治思想史(一) | (二一、五) | |
| 順治朝的逃人及投充問題 | 同 | 三、一(二五、五) | 同 | (二二、九) | |
| 唐代管理水流的法令 | 同 | 四、七(二五、九) | 同 | (二二、八) | |
| | | | 同 | (二四、一) | |

婚姻與家族(百科叢書)

(二三、八)

唐代經濟史(鞠清遠共著)

(二五、四)

革命論之基礎知識

法律學之基礎知識

革命論(社會科學常識叢刊)

法律學

商人通例釋義

親屬法大綱

三、編 譯

中國問題之回顧與展望

(一九、五)

唐宋以後宋人組織之行(加藤繁著)

× × × 新生命二、一二(一八、一一)

初期的白蓮教會(重松俊章著)

食 貨一、四(二四、二)

(附元律中的白蓮教會)

斯密亞丹論中國(連士升著)同

三、三(二五、二)

國家論(奧本海馬著)

馬克思經濟學說的發展

各國經濟史

〔附錄〕 陶氏論著的邦譯せられしもの

中國社會之史的分析(東亞經濟調查局發行)

經濟資料一五、一〇・一一(二八、二)

士大夫身分與知識階級(右附錄一)

中國社會史的一個攷察(右附錄二)

支那封建社會史(田中忠夫譯)

東洋三三、一・二・五・六・七(一九、一一七)

同〔附錄〕支那商業資本社會の發端(野原四郎譯註)

單行本(四海書房發行) (二〇、五)

中國社會の封建性

滿 誌七、六(二九、六)

西漢に於ける經濟の發達

經濟史研究一六、一七、一八、二〇(二〇、二・三・四・六)

支那に於ける婚姻と家族の發達

滿 誌八、三・四・五(二〇、三・四・五)

支那の商人資本及地主と農民(米澤秀夫譯)

(中國社會現象拾零所收)

東亞經濟研究一七、一(二二、二)

支那社會史講話(荒尾久譯)

(二四、)

略 傳

陶希聖、本名は陶彙曾。本年三十八歲。光緒三十四年

九歳にして旅汴中學に入學、辛亥革命（當時陶氏十二歳）の後、武昌に至り、郭泰祺經營する所の外國語專門學校に入學せしも、居ること歳餘にして北京に來る。時に纔に十五歳なり。最初は北京大學豫科にありて講義を傍聽せしも半年にして正式學生として入學。豫科卒業後、本科法律科に入學。時に五四運動始めて同大學國文科、哲學科方面より起り、法律科は未だその影響を受くるに至らざりしも、該運動の後、新文化運動新たに提唱せらるゝに至り、陶氏亦その影響を受けたり。この間にありて陶氏は法律哲學の研究に従事したれども、當時の法律學の講義なるものは單なる法律の條文の解釋たるに過ぎず、青年學徒の學究的欲望を満たすに足らざりしかば、陶氏は、法律學もその根柢に於ては當然社會科學の領域にまで研究の範圍を擴張せざるべからずとの見解のもとに、社會學、唯物史觀等の講義をなすべく、當局に歎願する等、當時に於て已に急進的學究態度を有したり。然れども未だ社會運動には參與するには至らざりき。

北大に學ぶこと七年、民國十一年同大學卒業後、安慶法政專門學校教授となりしも、民國十三年、商務印書館に招聘され、編輯に當ると共に、専ら社會學を究め、宗

法を以て支那の親屬繼承制度を説明し、數篇の論文を發表せり。民國十四年五卅事件の後、陶氏はその刺戟により漸く社會運動と革命運動とに接近し、雜誌「現代評論」を主編して勞資問題を論じ當局の忌諱に觸るゝ事さへ生じたり。

民國十六年、北伐軍武昌に至れる時、陶氏は中央軍官學校武漢分校政治教官たる旁、上海の暨南、復旦等の諸大學に教鞭を取れり。陶氏はその家庭、四周の環境よりして「濟弱扶傾」の念素より強しと雖も、只革命運動に對しては所謂紳士的態度を以て之に臨むのみにして、深く民衆とは接近する能はず、従つて武漢に至るの後も、概ね舊友とは反對の立場に立ち、全く孤獨の環境に置かれたり。その後武漢政府沒落し、江西省黨部の邀を受けて江西に至りしも、亦省黨部改組せられたれば、陶氏愈々困窮に陥れり。

該地に居ること數年、二三朋友の中央黨部への紹介によりて南京軍官學校教官となりしも、また七八ヶ月にしてこゝを去り、上海に至りて再び文士生活に返り、同志と共に「新生命月刊」の編輯に當れり。陶氏は中國社會史方面の撰述を、樊仲雲は國際政治の著述を擔任し、薩

孟武は三民主義の理論を解明するに努めたり。

民國十八年の頃より支那に於ては、支那社會の本質に關する論争盛に繰り返され、一派の者は支那社會を以て封建社會なりと認定せるに對し、一派の者は資本主義社會なりと主張して互に譲らず、支那學界はとみに活氣を呈するに至れり。この問題に對し、陶氏は即ち支那に於ては資本主義尙ほ未だ發達せず、封建勢力仍ほ存在せりとて所謂折衷主義的立場をとり、且又支那社會特有の支配階級として、士大夫階級なるものゝ、存在を指摘し、獨自の觀點より支那社會を分析せり。かゝる獨創的見解に尠からぬ理論的追隨者を見出し、氏の主宰せる新生命月刊の下に集れる此等の追隨者は總て論壇に於て一派を形成せり。かゝる關係より氏が代表せるこの理論家群は普通「新生命派」と稱せらるゝに至れり。かくして新生命月刊によりて一時に名聲を博せる陶氏は民國十七年より、十九年までこれが編輯に當りしも、十九年この雜誌の廢刊と共に民國二十年再び教壇に返り咲き、上半年は南京中央大學に於て中國政治史を講じ、下半年は北京大學に於て論壇に立つことゝなれり。

氏の北平に來るや、只管學術の研究をのみ意圖せしが北平に來れる直後、所謂九一八事件に遭遇して民族運動

の銷沈せるを痛感し、思想上に於ても大衝擊を受け急角度の轉換をなして、こゝに民族運動に参加するに至りたれば革命思想も自ら消失せり。

最近氏が特に意を注げる研究は支那經濟資料の蒐集にして、氏は具體的社會現象は充分なる歴史的材料あるに非ざれば説明する能はずとの見解のもとに社會形態も亦各種の社會現象の内部的連繫によりて始めて斷定しうるものにして歴史を了解せざれば現社會形態を判斷する能はずとなし、民國二十年以來分析的研究と共にまた史料の搜索に従事し、食貨半月刊も亦かゝる情形のもとに發刊せらるゝに至り、同二十三年十二月始めてその創刊號を出して學界に問ふことゝなれり。

現に氏は北京大學政治學系の教授にして、中國政治思想史、中國社會史の二科目を擔當し、現在支那に於ける政治、經濟、社會史に於ける一の大家たりといふべし。

【本稿を草するに當りては世界日報（民國二十四年二月十一日、十二日、十三日、十四日、十五日、十六日）紙上に掲げられたる「學人訪問記」陶希聖の條及び東亞經濟研究第十七卷第一號、米澤秀夫氏譯「支那商人資本及地主と農民」歷史學研究第一卷第二號、鈴木俊氏「陶希聖と中國思想史」並びに滿蒙第十八卷第一號、橋川時雄氏「支那學界の趨勢と北平文化の崩壊」に於ける陶氏略傳を参照せり。又論文索引を作成するに際しても主要なる著作の手許になきため之を檢索する能はず不備の點多々あり。大方の御教示を希ふ次第なり】